



かすみ 風子

Kasumi Fuko

旅
芝
居

十一時の汽車が東のトンネルに消えると、残された黒い煙を、旅芝居一座の幟がパタパタと山に追い払う。終戦から十一年、半農半漁の小さな村に元氣な祭りが戻ってきた。

栗拾いに行っていた子どもたちが、神社の裏山から、稲刈りの済んだ田んぼに次々に滑り下りてくる。斜めがけの栗袋は、四年生の陽子のだけが狸の腹のようにふくらんでいる。「まーた陽ちゃんが一番やあ」

弟の明が悔しがる。陽子に二握りずつ栗を足してもらった子どもたちは、嬉しそうに袋を抱えて帰って行く。祭りのごちそうに使う栗を山で拾ってくるのは、子どもたちの大切な仕事だった。一年生の明も、陽子と一つにした袋を肩から下げて、きげんよく帰って行った。

芝居の道具を積んだトラックが、神社の前に止まっている。舞台造りをしていた青年団の団長さんが、

「陽ちゃん、手伝っていけや」

と、声をかける。体の大きな陽子は、こうしていつも青年団の仕事を手伝わされる。トラックの荷台から、芝居に使う機材や道具が、一言を付けて陽子に渡される。

「それは曇だしけ、落とさんやあに」

「いっぺんにぎょうさん持ったら落とすがな」

「行灯あんどんの中の皿はしは外はずして」

「あつ……それは重ねかさたらあかん」

芝居の小道具みずか運びは難むずかしい。

「役者の人は、三時の夜行列車やこうれっしゃで来て、朝まで駅で寝ねなるだ」

祭りを仕切つかっている小父おじさんが陽子に教えてくれる。

「旅の役者は、雨露あまつゆがしのげる所ところだったら、どこでも寝ねることができる。駅えきのベンチなら御おんの字じだ」

と、若い頃ころ、旅の役者をしていたという小父さんが陽子の心配を笑い飛ばす。

境内けいだいに陽子の膝ひざぐらいの高さで芝居の舞台が組み立てられていく。畳たたみ十二枚ほどの板張いたばりの舞台と細長い花道が出来上がると、子どもたちが手に手に刀の小枝を持って舞台に駆かけ上がる。

「チャンチャンバラバラ チャンバラバラ」

刀の当たる音と口の音がずれていても気にしない子どもたち。切られて死んでもすぐ生き返る。子どもたちは不死身ふじみだ。電柱でんちゆうに止まっていたカラスが鳴きながら飛び立つ。すかさず舞台の前に走り出た明が、幕末まくまつの侠客きやうかく、国定忠治くにただちゆうじになり切きって見得みえを切る。

「ああ、カラスが駅の空に飛んでいかあ」

「違う違う。そのセリフは、忠治の乾分の定八のセリフだわ」

元役者の小父さんが明の忠治にケチを付けると、またチャンバラが再開した。小さな女の子たちも舞台上がって走り回る。

「汚い足で上がったらあかん！」

青年団長の鶴の一声で、子どもたちが、陽子と明を残して神社から消えた。

「陽ちゃんそこには、座長さんの家族に泊つてもらおうからよろしゅう頼むな」

団長さんが陽子に声をかける。他にも三軒が臨時の宿屋を頼まれ、役者を分宿させる。村にも近隣の村にも旅館や民宿がない時代だった。

「どんな人だらあ」

「座長さんは、背が高くて」

「鼻が高くて、背広着て、帽子かぶって……」

「外国の映画俳優みたいかなあ」

「小学生の息子は、一座の花形らしいでえ」

「ええ！ ほんま？」

大人たちが陽子と明の期待をふくらます。村にはまだ一台のテレビもなかった昭和三十

年代の初め、子どもたちにとって旅芝居の役者は、映画スターと同じようにまぶしい別世界の人だった。

「木の上を頼むわあ」

大銀杏おおいちようの木に梯子はしごをかけている小父さんが、身の軽い団長さんだんちやうを呼んだ。

「この高さでええですかあ？」

「そこでええから、両方の張りぐあいはりあひを同じにしてから、三回まわしてしつかり結むすんでくれや」

電柱の足場に太いロープが二本平行にして張られた。銀杏いちようの木から地上三メートルのロープは、高すぎて誰だれのジャンプも届とどかない。明日の芝居で、この上を化け猫ねこが渡わたるらしい。そのロープを見下ろすように、底そこの暗いレンズ雲くもが夕焼け空に浮うかんでいる。この雲が雨を運んで来たら芝居は中止だ。

「あーした天気になーあれ」

境内けいだいに戻って来た子どもたちが空に向かって、足を勢いきおい良く振り上げる。

「晴れ 晴れ 晴れ 晴れ」

と、陽子が裏うらになった靴くつを表おもてにしていく。それを見て、漁師りようしの小父さんが、
「明日もええ天気だわいや」

と笑いながら太鼓判を押す。年寄り漁師の天気予報は、ラジオよりも良く当たる。みんなは、ほっと胸をなで下ろした。

北の障子を開放つと、絶好の芝居日和。刷毛で掃いたような筋雲が青い空をより高く見せていた。村でただ一そのイカ釣り船が、大漁旗で祭り気分を盛り上げている。船首から堤防に向かって伸びている碇止めのロープの上を、両手を広げた人影が弥次郎兵衛のように渡っている。二階にある客間の窓と船着き場の堤防までは、だいぶ離れているので、顔までは見えない。

「上手いなあ」

ロープの下は、この日の空よりも濃い瑠璃色の海。水深五メートルの船着き場だ。晴れていても、十月の海はもう冷たい。

「誰だらあ？」

あんなことができそうな子は村には一人もいない。二人は顔を見合わせて、客間のガラス磨きを終わりにした。戸口でぶつかつたサングラスの小父さんにおじぎだけして家を飛び出した。

県道から浜に下りて、波打ち際の固い砂地を走る。ロープの上でバランスをとっていた両手が揺れて、男の子が落ちた。手はげしく水面をたたいている。陽子は、靴とスカートを脱ぎすてた。あれは溺れているのだ。

「陽ちゃん！」

明が陽子の服をつかんで首をふる。

「わかつてるー」

陽子は、急いで靴をはき直した。「溺れている人を助けに海に入ったらあかん。死に物ぐるいでつかんでくる」といつも母ちゃんに言われていたのだ。

「早く大人を呼んで来て！」

と弟を走らせると、駆け込んだ舟小屋から竹竿を持ち出した。時々水面をたたく手が、頭と一緒に消える。堤防を支えている岩場は、青のりがかかって滑りやすい。陽子は、足を開いて、キユツと下くちびるをかみしめて竿を伸ばした。

「つかめ……つかめ……つかめ」

短い言葉をくり返す。竿の先がしずんだ。竹竿をつかんだのだ。陽子は、両わきをしめて一歩ずつ後ずさりする。

「陽ちゃんーん」

叫んでいる明の前を、帽子と背広を脱ぎ棄てながら大人が走ってくる。革靴で青のりの岩場を三段跳び。

「危ない！」

滑ったのではない飛び込んだのだ。溺れていた子を抱きかかえて岩場が上がってきたのは、さつき戸口でぶつかつたサングラスの小父さんだった。浜に下りて来ていた婆ちゃんが手まねきをして小父さんと呼んだ。婆ちゃんは、陽子が知っているだけでも二度も溺れた子を助けたことがある。

婆ちゃんにほほをたたかれて男の子の顔がゆがむ。

「大丈夫だあ」

水を飲んでいるだけで、意識はある。

「水を吐かしたらあーでえ」

婆ちゃんは、持つて来た一升たきのお釜をひっくり返し、溺れていた子をその上に腹はいにして乗せた。背中をたたいたり、さすったり。最後は腰の横から腹がわにゆっくりさすり上げ、

「吐きねえー吐きねえー。飲んだ水を吐いたら楽になるしけえ」

と、言いながら同じ動作をくり返す。婆ちゃんは、水を吐かせるにはこの方法が一番だと

言う。のぞき込んで見ていた明の足に、吐いたどろどろの水がかかった。

「もう大丈夫だわいや」

婆ちゃんに起こされた男の子と目があつた。スカートを脱いでいた陽子は、急いで婆ちゃんの後ろに隠れ、パンツのゴムを持ち上げた。

明が持つてきてくれたスカートからコメツキガニが落ちた。セミの抜け穴の様な穴を掘つて、白砂に住んでいる砂と同じ色の小さなカニだ。カニは、すごいスピードで巣穴に帰つて行つた。やつと笑つた男の子の顔に桃色のくちびるが戻つた。濡れネズミの男の子は、旅の一座の子役で竹沢凜太郎と名乗つた。二人は、陽子の家に泊まる座長とその子どもだつた。

「何年生？ ぼくは一年」

「……五年」

長いまつ毛を伏せた凜太郎のあごにしわが寄る。凜太郎は、小さい時から旅から旅の生活で、学校には行つてなかつた。

「毎日が夏休みみたいで、ええなあ……なあー」

と、同意を求める明を無視して、陽子は、かかどで砂を掘つていた。鼻水が出るのに手足が妙に熱い。(学校には、行きたいに決まっている)と思つた。

「握手をしなさい」

突然の座長の声に陽子の方が先に手を出してしまった。恥ずかしさに耳たぶまでもが熱くなる。袖口から水が垂れた凧太郎が慌てて手を離す。陽子は、濡れたままの手を耳に当てた。

昼を少し過ぎると、祭りの栗赤飯が蒸しあがった。陽子は、芝居の場所取りに使う筵を抱えて、目と鼻の先にある神社に行った。「舞台に向かって右側の前から三番目」と婆ちゃんに言われた場所に筵を広げる。

「まだ前の方がいっぱい空いてるでえ」

と一番前に筵を敷き終わった小母さんが呼んでくれる。

「婆ちゃんが、今年はこの辺がええんだって」

「なんでだらあー。いつもは一番前に敷きなるのに」

確かに婆ちゃんは一番前のかぶりつき席が好きだ。陽子も小母さんと一緒に首をかしげながら、筵が風でめくれれない様に砂袋を四すみに置いた。

チンチン ドンドン チンドン

芝居を盛り上げるためのチンドンが村の目抜き通りから聞こえて来る。目抜き通りと

いつても、この他に車の通れる道は、時々魚を積んだトラックが行き来するジャリ道の県道だけだ。浜で遊んでいた子どもたちが、色々な路地を通って集まって来る。

侍姿のお兄さんが吹くクラリネットの流行歌に合わせて、チンドンの行列がゆっくりと進む。時々間違つたのか、同じところを吹き直す。それでも一曲終わることに開けられた戸口で拍手がわきおこる。子どもたちがクラリネットを吹く真似をして一緒に歩いて歩く。

「本日、竹沢松太郎一座がご当地で観ていただきます演目は、映画や講談でもおなじみの、『岡崎の化け猫』でございます」

「皆様に喜んでいただけますよう安全ネットを張らずに化け猫が高い綱を渡って演技いたします」

「もう一つの演目は、任侠もので迫力ある立ち回りをお楽しみいただきます。が、演目は、今宵のお楽しみとさせていただきます」

「どうぞこうふんしてお子たちが舞台上に上がらない様よろしくお願いいたします。切られて血が出て小さい保障はいたしません」と、刀をぬいて子どもたちを喜ばす。

「尚、未熟ではございますが、舞踊ショーもございます。今宵は、皆様おさそいの上、こぞって神社に足をお運びくださいませー」